

少年非行を防止するための「スケアード・ストレート」等の
少年の自覚を促すプログラム

キャンベルレビュー更新版 1

Anthony Petrosino, Ph.D.
Research Consultant
[Coordinator, Campbell Crime & Justice Group]
Bedford, Massachusetts, USA

Carolyn Turpin-Petrosino, Ph.D.
Associate Professor
Department of Sociology and Criminal Justice
Bridgewater State College
Bridgewater, Massachusetts, USA

John Buehler, M.S.
Department of Statistics
Harvard University
Cambridge, Massachusetts, USA

レビュー初回公表日： 2002年5月
更新版 1 公表日： 2003年11月

キャンベルレビューの編集過程における主任アドバイザー
ペンシルベニア大学教育学研究科 Robert F. Boruch教授

本レビューは、「Petrosino Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino, and John Buehler. “‘Scared Straight’ and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency” (Updated C2 Review). In: *The Campbell Collaboration Reviews of Intervention and Policy Evaluations (C2-RIPE)*, November, 2003. Philadelphia, Pennsylvania: Campbell Collaboration」として引用されたい。

この更新の新しい点は何か？

このキャンベル初回レビューの更新版では、著者は、

- 「キャンベル共同計画研究レビュー政策要約」を含めた
- 必要に応じ、初回レビューを訂正・添削した。
- 「緊急政策課題」の章を設けた
- **2003年11月**まで探索期間を延長した
- 図書館・オンラインで最近利用可能となった電子化された書誌データベースを用いて新たな探索を行なった
- メタ・アナリシスによる比較をさらに行なった
- 「収束するエビデンス」の章を設けた
- 「「なぜ」という質問に答える」の章を設けた
- 「実務への示唆」及び「研究への示唆」の章の議論を充実させた
- 「結論」の章を設けた
- この研究を基にした、公表済み及び公表予定の論文の一覧を掲げる章を設けた
- 「引用と活用」の章を設けた
- 更新版における新しい章にフラグをつけた

キャンベル共同計画研究レビュー 政策要約 **2003年11月28日**

少年を刑務所の見学に連れて行くことは将来の犯罪と非行を抑止するか

政策上の疑問

最近のイリノイ州法は、将来犯罪行動を行なうおそれのある児童を識別して、これらの児童を成人刑務所施設の見学をさせることを定めた。この法律は、非行少年や非行少年になるおそれのある児童に、刑務所施設を計画的に訪問させるプログラムである、「スケアード・ストレート」をはじめとするプログラムを用いてきた長年の歴史を繰り返したものである。このプログラムは、刑務所の生活を実地に観察させ、成人受刑者と接触させることにより、参加者が将来、犯罪を犯すことを抑止することを目的としている。これらのプログラムは、参加者の犯罪と非行を減少させるのに役立つのだろうか。

キャンベル共同計画レビューの結果

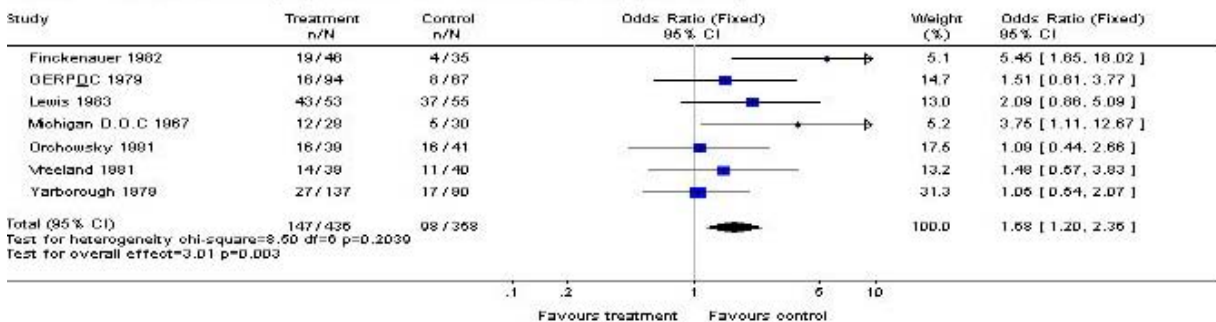
本レビューの結果は、このプログラムは犯罪を抑止しないばかりか、より多くの犯罪行動を引き起こすことを示している。このプログラムを容認している政府職員は、このプログラムが本来守らなければならない市民に対し、より多くの害を与えていないことを確認するため、厳密な評価を行わなければならない。

方法論

レビューの著者は、スケアード・ストレート及び同様のプログラムの、将来の犯罪に対する効果を評価するため、無作為（ないし無作為と思われる）研究の精力的な探索を行なった。その結果、9件の無作為化研究が見つかり、そのうち7件が、メタ・アナリシスとして知られる統計手法に、これらの研究を含めることを可能とするアウトカムデータを報告していた。ほとんどの研究は、処遇直後以降の時点については測定結果を報告していなかったため、「処遇直後の効果」についてのみ、メタ・アナリシスに含めることが可能であった。残念なことに、非行の頻度・重大度、非行までの期間などについてはほとんど情報が提供されていなかったため、メタ・アナリシスは、非行者率（それぞれのグループにおける、再犯者と非再犯者の比率）についてのみ行なわれた。

下記のグラフにおいては、メタ・アナリシスに用いられた7件の研究が分析され、「フォレスト・グラフ」を用いて、図示されている。研究の著者が左端に示されており、その右に、逮捕された（あるいは、新たな犯罪を犯した）参加者の数が処遇群と統制群の合計人数と比べて示されている。処遇群とはスケアード・ストレートや同様のプログラムを受けた群で、統制群とは受けなかった群である。グラフでもっとも重要なのは、オッズ比が1より大きければ統制群に有利で、1より小さければ実験群に有利だということである。ほとんどすべての研究で、オッズ比が統制群が有利であることを示しており、その結果、メタ・アナリシスは全体として、プログラムがマイナスであることを示している。

Review: "Soared Straight" and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency
 Comparison: 01 Intervention versus Control, Crime Outcome
 Outcome: 01 Post-intervention - group recidivism rates - official measures only (fixed effects)



レビュー全文については、www.campbellcollaboration.org にある、キャンベル共同計画介入・政策評価レビュー (Campbell Collaboration Reviews of Intervention and Policy Evaluations (C2-RIPE)) データベースを用いられたい。

消費者向けの要約

「スケアード・ストレート」のようなプログラムは、非行少年や非行化するおそれのある児童による刑務所施設への、計画された訪問を伴うプログラムである。このプログラムは刑務所の生活を実地に観察させ、成人受刑者と接触させることにより、参加者が将来犯罪を犯すことを抑止することを目的としている。本レビューの結果は、このプログラムは犯罪を抑止しないばかりか、より多くの犯罪行動につながることを示している。このプログラムを容認している政府職員は、このプログラムが本来守らなければならない市民に対し、より多くの害を与えていないことを確認するため、厳密な評価を行わなければならない。

コクラン共同計画レビューとの関連

Petrosino A, Turpin-Petrosino C, Buehler J. "Scared Straight" and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency (Cochrane Review). In: *The Cochrane Library*, Issue 4, 2003. Chichester, UK: John Wiley & Sons, Ltd.

要約

背景

「スケアード・ストレート」その他のプログラムは非行少年及び非行化するおそれのある少年による刑務所訪問を含むプログラムである。プログラムは、刑務所の生活を直接観察し、成人受刑者と接触することで、参加者に将来犯罪を犯させないようにすることを目的としている。目的犯罪活動から抑止するために、非行少年（少年裁判所において、正式に判決を受けたあるいは有罪判決を受けた）による刑務所訪問プログラムの効果を吟味すること。

探索手法

第一著者による1945年から1993年の無作為化実験のハンドサーチは、キャンベルのSPECTR及びコクランのCCTRを含む、19のデータベースの構造化探索によって補強された。分野の専門家にも照会し、関連する引用文献についてもフォローした。

選択基準

非行少年ないし非行化するおそれのある少年による刑務所訪問を内容とするプログラムの効果を検証したすべての研究を含んだ。少年と若年成人の両方（たとえば、14-20歳）を対象とする研究も含んだ。参加者を無作為ないし擬似無作為に（つまり、交互に）割り付けた研究のみを対象とした。それぞれの研究は、処遇を受けない統制条件を持ち、訪問後の犯罪行動について最低一つのアウトカム尺度を持っていないなければならない。

データ収集と分析

9つの研究が選択基準を満たしたので、まず、文章でその内容を説明する。ついで、公的データに基づき、介入後の犯罪率のメタ・アナリシスを行った。その他の情報（例えば、自己申告非行）はいくつかの研究にはなく、重要な情報（例えば、標準誤差）が欠けていた。それぞれの群における再犯率を用いて、処遇直後の効果（直近効果）をオッズ比として計算し、固定効果、ランダム効果のいずれのモデルも仮定して分析を

行った。

主たる効果

分析は、介入は何もしないよりも有害であることを示した。プログラムの効果は、固定効果あるいはランダム効果モデルのいずれを仮定しても、ほとんど同じ大きさで方向は有害であり、メタ・アナリシスの手法には関係がなかった。

レビューワの結論

「スケアード・ストレート」のようなプログラムは、同じ青少年に対して何もしないのと比べて、有害な効果を及ぼし、非行を増加させる傾向があると結論する。この結果を踏まえ、このプログラムを犯罪防止対策として推奨することはできない。このようなプログラムを認容している機関は、これらのプログラムが本来の目的（犯罪防止）を達しているかどうかだけでなく、最低でも、益でなく害を引き起こしていないことを確認するために、厳密な評価を行わなければいけない。

本レビューの引用

「Petrosino Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino, and John Buehler. “Scared Straight’ and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency” (Updated C2 Review). In: *The Campbell Collaboration Reviews of Intervention and Policy Evaluations (C2-RIPE)*, November, 2003. Philadelphia, Pennsylvania: Campbell Collaboration」として引用されたい。

緊急政策課題

2003年8月23日、イリノイ州知事Rod Blagojevichシカゴ公立学校システムに対し、「選択(Choices)」というプログラムを導入する法案に署名した(United Press International 2003)。このプログラムは、将来犯罪を犯すおそれのある生徒を見極め、彼らが将来犯罪を犯さないよう、「州刑務所の見学」をさせるというプログラムである(Long and Chase, 2003)。記事が明らかにしているとおりの、政治家は法律を制定しなければならないだけの理由があった。若い子どもの親は自らの子どもが犯罪を行なうような人生から遠ざけるため真剣に方法を探している。早くから(場合によっては、11歳、12歳といった年齢で)少年が非行集団に入っていることを踏まえ、政治家には、これらの少年に対し、より重大な行動を思いとどまらせるために、早期から人生に介入するようにとの圧力が働いている。知事は、「このプログラムは、少年に対し規則を守らないと何が起きるか、将来に何が待っているかを知らしめるチャンスを与える」と話したとされている(Long and Chase, 2003, p. 1)。

これは、シカゴ・トリビューンの記事に簡潔に伝えられた議論の一面に過ぎない。このプログラムに対しては、明らかに反対意見があり、この批判の一部は、同様のプログラムに関する過去の研究に基づくものである。確かに、ある反対論者は、この刑務所見学は、非行を減らす効果がないことが示された「スケアード・ストレート」タイプのプログラムを復活させる試みであると述べている(Long and Chase, 2003, p. 1)。この反論は正しいのだろうか。あるいは、イリノイ州政府はこの法律を導入するに当たり、的を得ているのだろうか。

この問いに答えるには、科学的エビデンスを吟味する必要がある。このキャンベルレビューの更新では、スケアード・ストレート及び同様の刑務所見学プログラム(ここでは、少年の自覚を促す、あるいは、刑務所についての認識を深めるプログラムとも言う)に関する9件の無作為化実験の系統的レビューの結果について、報告する。もちろん、過去の研究は、介入が、将来の状況で有効である(あるいは、有効でない)という保証ではない。しかし、読者は、この系統的レビューの結論を読んで、次の問いを自問することになる。医師に、このような研究結果が示されているのと同じ治療を、我が子に処方してもらいたいとおもうだろうか。

背景

1970年代、ニュージャージー州刑務所で終身刑に服している受刑者が、非行少年や非行化するおそれのある少年を将来犯罪の道に進むことから防ぐために、「脅かそう」といおうプログラムを始めた。「スケアード・ストレート」として知られる、このプログラムは、その主たる要素として、刑務所を訪問した少年に対す

る、受刑者による攻撃的なプレゼンテーションを有していた。プレゼンテーションは、成人刑務所の生活を描写するもので、特に、強姦及び殺人についての誇張した話を含んでいた (Finckenauer 1982)。1979年に放映されたテレビ・ドキュメンタリーは、「スケアード・ストレート」を終えた17人の非行少年のうち16人 (94%の成功率) が、終了後3か月間、法に触れない生活を送っていることを伝えている (Finckenauer 1982)。この番組におけるその他のデータでは、80%から90%の成功率を示していた (Finckenauer 1982)。プログラムは、メディアから大きなまた好意的な関心を集め、全国の30以上の司法管轄区域で実施に移され、連邦議会では下院教育・労働委員会人的資源小委員会により、プログラムと番組についての特別聴聞会まで開かれるに至った (US House Committee on Education Labor 1979)。

「スケアード・ストレート」タイプのプログラムの背景理論は抑止理論である。プログラムの支持者は、受刑者による、刑務所の生活の生々しい描写やプレゼンテーションが、非行少年 (や非行化するおそれのある少年) をさらに犯罪を関わらないようにすると信じている。当初ニュージャージーで行われていたような、厳しく、時には、残虐なプレゼンテーションは非常に有名だが、現在では、受刑者によるプレゼンテーションは対決的というより教育的な場合もあるが、犯罪を防止しようという目的は同様である (Finckenauer 1999; Lundman 1993)。これらのプログラムには、「ののしり」セッションとも言われる、受刑者と少年の間の討論を含むものもある。受刑者を人生経験と刑務所生活の現状についての語り手として用いるプログラムは、少なくともアメリカ合衆国においては、もっと長い歴史があり (Brodsky 1970; Michigan D.O.C 1967)、このようなプログラムが人気があるのは驚くに当たらない。これらのプログラムは、(厳しくすることで) 犯罪を防止したり減らしたりすることができるという一般的な概念と一致しており、非常に安価で (メリーランド州のプログラムは参加者一人当たり1ドル未満であった)、収容された犯罪者に対し青年が同じ道をたどるのを防ぐことにより社会に建設的に貢献する方法を与えるからである (Finckenauer 1982)。

ニュージャージー州のプログラムの無作為統制実験が1982年に公表されたが、処遇を受けない統制群と比較して、参加者の犯罪行動には効果がないことが報告された (Finckenauer 1982)。実際、Finckenauerは、実験プログラムを受けた参加者のほうが逮捕される傾向があることを報告している。アメリカ合衆国で報告された、その他の無作為実験も、「スケアード・ストレート」タイプのプログラムがその後の犯罪性を減少させるかどうかについて疑問を呈する結果となっている (Greater Egypt Regional Planning & Development Commission, 1979, Lewis 1983)。これらの知見と一貫し、犯罪防止プログラムの効果に関する研究のレビューは、スケアード・ストレートのような、抑止を志向したプログラムは無効であること (Sherman et al. 1997, Lipsey 1992) を示している。実際、メリーランド大学

による、500以上の犯罪防止評価研究についての、広く知られたレビューでは、「スケアード・ストレート」は無効なプログラムと評価されている (Sherman et al 1997)。青少年暴力に関するアメリカ保健福祉庁長官の報告書は、防止をはじめとする対策をレビューし「スケアード・ストレート」について同様の結論に達している (US Department of Health and Human Services 2001)。

このように研究やレビューからのエビデンスが同じ結論に達しているにも関わらず、「スケアード・ストレート」タイプのプログラムは、アメリカ合衆国では人気がありいまだに用いられている (Finckenauer and Gavin 1999)。たとえば、ネバダ州カーソンシティのプログラムでは、非行少年をネバダ州立刑務所の見学に連れて行く (Scripps 1999)。ある参加者は、見学のもっとも印象に残っている部分は、すべての受刑者が自分たちをセックスの対象として呼びかけてきたこと、自分たちの持ち物を奪おうとして争っていたことだと述べている (Scripps 1999)。ユナイテッド・コミュニティ・アクション・ネットワークは、非行化する少年を4, 5人の仮出獄者と一緒に刑務所の房に閉じ込めるという「Wisetalk」というプログラムを有している。彼らによれば、この介入を受けた300人の少年のうち10人しか再逮捕されていない (United Community Action Network 2001)。2001年には、上司の了解なく、刑務官が、「スケアード・ストレート」の成功を理由として、道を外れた少年の人生を変えるためのまっとうな手法であるとして、刑務所を訪問中のワシントンDCの学生を裸体捜検した (Blum and Woodlee 2001)。

「スケアード・ストレート」などの少年による刑務所訪問プログラムは、その他の国でも用いることができる。例えば、オーストラリアでは「刑務所での一日」や「拘置所での一日」 (O'Malley 1993)、英国では「一日訪問」 (Lloyd 1995)、ノルウェイでは「Ullersmoプロジェクト」 (Storvoll and Hovland 1998) と呼ばれるプログラムがある。Hall (Hall 1999) は、ドイツにおいて、ネオナチなどの憎悪集団につながるのある若年犯罪者を脅かして更生させるために考えられたプログラムについて肯定的に報告している。同様のプログラムは、カナダでも試されている (O'Malley 1993)。

1999年には、「スケアード・ストレート：その20年後」と題する番組が、アメリカ合衆国のテレビで放映され、1979年の番組と同様の結果を主張した (UPN 1999; 'Kids and Crooks,' 1999)。この番組では、3か月間の追跡期間中、プログラムに参加した12人の少年のうち10人が犯罪を犯さなかったと報告している (Muhammed 1999)。1979年の番組と同様、統制群・比較群のデータは示されなかった。「スケアード・ストレート」タイプのプログラムは、多要素から成る少年介入のパッケージの一要素であることが多い (Trusty 1995, Rasmussen 1996) もの、これに対する肯定的報告や記述はそれ以外にも見出すことができる (例えば、ドイツでは[Hall 1999], フロリダでは[Rasmussen 1996])。

2000年には、Petrosinoとその同僚が、9件の無作為化フィールド試験について、個々の研究のパーセント差を用いて、予備的な系統的レビューを行なった。その結果、スケアード・ストレートのようなプログラムは、処遇を受けていない統制群と比して、実験群における犯罪を1%から28%増加させることを見出した。2002年には、このレビューに先立つキャンベル・レビューが、2000年の論文を改め、さらに洗練されたメタ・アナリシスの手法を用いて、(コクラン共同計画と同時に)公表された。それまでと同様に、スケアード・ストレート等の少年の自覚を促すプログラムについて、否定的な結果を報告した。この文書は、新しくより広範な探索、追加的な分析、そして必要に応じ修正を行なうことにより、前回のレビューを更新したものである。

目的

(少年裁判所によって、正式に判決を受けたあるいは有罪判決を受けた)非行少年あるいは(問題は起こしているが正式には判決を受けていない)非行化するおそれのある少年に刑務所を訪問させ、犯罪活動から遠ざけることを目的とするプログラムの効果を吟味する。

このレビューの対象とする研究の選択基準

研究のタイプ

処遇を受けない統制群を持ち、対象者を割り付けるに当たって、無作為化ないし「おそらく」(すなわち、擬似)無作為化(例えば、ケースを一つずつ交互にグループに割り付けたり、偶数・奇数で割り付ける)手続きを用いた実験のみが含まれる。

参加者のタイプ

少年(17歳未満の児童)を対象とする、あるいは、少年と若年の成人の双方(例えば、13歳から21歳)をカバーする研究だけが含まれる。このレビューにおいて、たった1件だけ、年齢の上限として19歳を用いているものがある(Locke 1986)。非行少年ないし非行化するおそれのある少年を対象とする研究のみを含む。

介入のタイプ

プログラムの参加者による刑務所訪問をその主たる要素として持つ研究だけが対象である。プログラムの大半は、生々しいもの(Finckenauer 1982)から教育的なもの(Cook 1992)までのさまざまな幅のある、受刑者によるプレゼンテーションを含んでいる。プログラムは、(8時間受刑者として過ごすといった)オリ

エンターション・セッション, 刑務所の見学などを含むことがある。

アウトカム尺度のタイプ

研究は, 逮捕, 有罪宣告, 警察との接触, 自己申告犯罪などによって測定される, 最低一つの, その後の犯罪行動のアウトカムをもっていなければならない。市民, 政策・実務決定者, メディア, 研究者の利益は, 「スケアード・ストレート」等の少年による刑務所訪問プログラムがこれらの尺度に影響を与えるかどうかにある。

コクラン共同計画やキャンベル共同計画の今後のレビューワが, 対象となる研究を見つける際に必要とする場合があるので, 評価者の報告している, 犯罪以外の (例えば, 態度や教育に関する) 尺度及びそれに対する効果について, 分析はしないものの一覧としておくこととした。こうした一覧は, プログラムの意図せざる利益や結果を見出すためにも有用である。

研究の探索手法

公表バイアス(雑誌が, 帰無仮説を棄却しプログラムが有効であることを見出した知見を, 未公表の文献に比べ, 公表しやすい傾向)を最小にするために, 私たちは公表, 未公表の研究を見つけ出すために工夫して探索を行った。また, 分野バイアス(たとえば, 犯罪学の雑誌に報告されたり, 分野固有の要約データベースに掲載されたりした評価研究が, 心理学, 社会学, 社会福祉, 公衆衛生, 教育学の情報源に報告された評価研究と異なることによるバイアス)の可能性を最小にするために, 広範な探索を行った。

第一に, 第一著者が作成した犯罪減少に関する実地試験(Petrosino 1997)についての大きなレビューから, 無作為化実験が同定された。Petrosinoは, 次の手法を用いて300以上もの無作為化実験を見出した。(1)ハンドサーチ(すなわち, 視覚的に, 犯罪学及び社会科学に関する29の主要雑誌のすべての内容をチェックした), (2)「刑事制裁の無作為化実験の登録データベース」(Weisburd 1990)に登録された研究のチェック, (3) Criminal Justice Abstracts, Sociological Abstracts and Social Development and Planning Abstracts (Sociofile), Education Resource Information Clearinghouse (ERIC) and Psychological Abstracts (PsycINFO)の詳細な電子的検索, (4) National Criminal Justice Reference Service (NCJRS)を含む18の文献データベースの情報専門家による探索, (5) 200人以上の研究者と100以上の研究センターに対する広範な郵便による依頼, (6)学会のニューズレターにおける依頼, (7)関連する, 50を超える系統的レビュー及び文献統合の参照文献の追跡, (8)関連する書誌目録, 図書, 論文, その他の文書における引用の追跡。探索手法に関する, 詳細はPetrosino (Petrosino 1995, Petrosino 1997)に述べら

れている。Petrosino (Petrosino 1997)に見いだされる引用は、1945年1月1日から1993年12月31日の間に公表された文献をカバーしている。このサンプルから、7件の無作為化実験が条件を満たすものとして同定された。

第二に、Petrosino (Petrosino 1997)が見逃した実験を見つけ、より最近の文献(1994年-2001年)もカバーするための探索を行い、上記の探索結果を補った。その方法は、(1) UKコクランセンターによって開発され、現在はペンシルベニア大学教育学大学院によって運営されている、キャンベル共同計画社会・心理・教育・犯罪実験登録データベース(C2-SPECTR) (Petrosino 2000)の広範な探索、(2)より新しい研究をカバーしている、より最近の系統的ないし伝統的レビュー(例えば、Sherman et al 1997; Lipsey and Wilson 1998)の引用文献のチェック、(3)「スケアード・ストレート」及び同様のプログラムに関する文献の引用のチェック(e.g. Finckenauer and Gavin 1999)、(4)研究者とのeメールの交換、(5)コクラン・ライブラリ(2002年第1号)のコクラン統制実験登録データベースの広範な探索である。広範な探索とは、まず、犯罪や非行に関する文献を見つけ、ついで、本レビューの対象の介入に関するものであるかどうかを引用や要約を実際に目で見ることの意味している。つまり、「犯罪」、「法律」、「犯罪者」、「非行」といった語を用いて、研究をたくさん集め、これらを一つ一つ見ながら、このレビューの対象とすべき研究であるかどうかを決定した。

第三に、本トピックに関連する14のデータベースについて、特別な探索を行った。これらの多くは、公表・未公表の文献(例えば、博士論文や政府の報告書)を含んでいる。探索は、ハーバード大学から利用可能できる、あるいは、その他インターネットで無料で検索できるデータベースを用いて、オンラインで行われた。ハーバード大学やインターネットから利用できない、Criminal Justice Abstracts やその他のSilver Platter社のデータベースを利用するため、マサチューセッツ大学ローウェル校も出かけた。検索した文献データベースと、検索対象年度は以下のとおりである。

Criminal Justice Abstracts, 1968- September 2001
Current Contents, 1993-2001
Dissertation Abstracts, 1981-August 2001
Education Full Text, June 1983-October 2001
ERIC (Education Resource Information Clearinghouse) 1966-2001
GPO Monthly (Government Printing Office Monthly), 1976-2001
MEDLINE 1966-2001
National Clearinghouse on Child Abuse and Neglect (through 2001)
NCJRS (National Criminal Justice Reference Service) through 2001
Political Sciences Abstracts, 1975-March 2001
PAIS International (Public Affairs Information Service), 1972-October 2001

PsycINFO (Psychological Abstracts) 1987–November 2001

Social Sciences Citation Index, February 1983–October 2001

Sociofile (Sociological Abstracts and Social Planning And Development Abstracts)
January 1963–September 2001

これに加え、コクラン発達・心理・学習障害グループ(初回のレビューの編集グループであり、同時に発表されたコクランレビューに責任を持っているグループ)が、特別の治験データベースの検索を行なった。この特別のデータベースは多くの文献データベースをカバーし、国際的でもある、広範なものである。同グループがこのデータベースをどのように構築し維持するために用いている検索の詳細については、コクラン・ライブラリ(2003, Issue 4)により提供されている。

「スケアード・ストレート」に関する文献はそれほど多くないと予測されたので、プログラムに関するすべての引用を探し出し、探し出された中からレビューの対象にふさわしい研究を抽出するというのが、とるべき探索方法であると考えた。この方法をとることにより、無作為化実験を表すキーワード(例えば、無作為割付)を含める必要がなくなった。何度か試行した後、「スケアード・ストレート」あるいは「少年の自覚(juvenile awareness)」といった語句を、タイトルや要約に持つほとんどすべての文書を見つけ出すことができた。すなわち、関連する文献を見出すため、それぞれのデータベースについて、下記の語句による探索が行われた。

‘scared traight’

(‘prison or jail or reformatory or institution’) and (‘orientation or visit or tour’)

‘prisoner run’ or ‘offender run’ or ‘inmate run’

‘prison awareness’ or ‘prison aversion’ or ‘juvenile awareness’

(‘rap session’ or ‘speak out’ or ‘confrontation’) and (‘prisoner’ or ‘lifer’ or ‘inmate’ or ‘offender’)

探索手法の更新

2003年11月に至るまでの期間まで延長して、上記のデータベースについて検索を行なった。これには、C2-SPECTRとCENTRALの新たな検索も含む。また、キャンベル共同計画刑事司法グループがwww.aic.gov.au/campbellcjにおいて、「研究探索(“Searching for Studies”）」のもとに提供している資源をも利用した。さらに、初回レビューの公表以降利用可能となった文献データベースへのアクセスも行なった。Bridgewater State College及びマサチューセッツ大学のオンライン・アクセスを通じて、Chelmsford公立図書館において新たな検索を行なった。新たなデータベースにおいては、利用できる限りのすべての年について検索を行なった。すなわち、

Expanded Academic ASAP 1980-2003

Social Work Abstracts 1977-2003

Social Service Abstracts 1980-2003

レビューの手法

実験の選択

この探索手法(但し、1000以上ものウェブサイトを見出した、インターネット検索を除く。)により、500件以上の引用が見つかり、その多くは要約を伴っていた。第一著者が、これらの引用をふるいに掛け、そのうち30件について評価報告であることを確認した。第一著者と第二著者は、これらの引用を独立に精査し、11件についておそらく無作為化実験であると合意した。すべての報告が入手された。

全文を調べた結果、2件の研究を除外した。1件は、プログラム終了後の犯行尺度を欠いていたため除外した。これはウィスコンシン州の刑務所で行われた「Project Aware」(Dean 1982)である。著者と接触しようとする、あるいは、ウィスコンシン州矯正局のその他の報告書からデータを得ようとする努力が不首尾に終わった。もう1件は、ハワイ州で行われた「Stay Straight」で、無作為割付でなかった(Chesney-Lind 1981)ため除外した。2件を除いた結果、9件の無作為化実験が残った。現在進行中の実験は見つからなかった。

レビューの手法の更新

私たちの検索手法では、新たな文献の引用はほとんど得られなかった。例えば、そのうちの一部は、私たち自身がこれまでに発表したレビューや論文だった。第一著者はそれぞれの引用を吟味し、いずれも本レビューには無関係であると結論した。攻撃的な生徒を刑務所に連れて行く、少年の自覚を促すプログラムを、肯定的に描いた報告書が見出された(O'Donnell and White 2001)が、評価データは報告されていなかった。この更新の過程で、怠学者に対する「スケアード・ストレート」プログラムの評価があることを知ったが、この研究は無作為化を伴っていない(この研究は、論文の相互審査の過程でその存在を知ったもので、著者名や典拠は示すことができない。現在、この論文はその雑誌の、修正と再提出の段階にあるとのことで、発表されたら、除外された研究として引用する予定である)。

方法論の質の吟味

研究の質を格付けする要素はたくさんある。方法論の吟味を難しくしているのは、レビュー側は、研究者の書いた報告書に、多かれ少なかれ基づかなければならないということである。方法論の部分が(時には、雑誌のスペースの関係で)手短にしか書かれてお

らず、デザインや分析の重要な特徴が書かれていなかったり、あまりにも、圧縮されていたりする。そこで、犯罪学実験にとってもっとも重要であり、かつ、実験報告から抽出が可能であるのは、以下の4つの要素であると考えた。それらは、

1) 無作為化の完全さ

実験・統制条件への参加者の無作為割付が、無作為割付手続きに対する深刻な違反や転覆を受けたと、研究者が報告しているか。

2) 当初の標本からの脱落

当初、無作為化された標本からの、参加者の少なからぬ脱落や減少を、研究者が報告しているか(「少なからぬ」脱落とは、当初の標本からの25%以上の減少と定義していたが、この分類は放棄した)。

3) アウトカムの評価者の盲検化

アウトカムデータを収集する責任を持った者が、処遇の割付について、「分からない」ようにするための手段がとられたと、研究者が報告しているか。

4) プログラム実施の忠実さ

プログラムの実施があまりにも問題があるので、評価が介入の効果の正確な吟味ではないと報告しているか。

これらの基準の一つないしそれ以上に、欠陥があると報告している研究は、感度分析を行なって、メタ・アナリシスへの影響を吟味する。感度分析においては、その研究をメタ・アナリシスから外して、結果に影響があるかどうかを見た。

データの管理と抽出

第一著者は、特別に設計した調査票を用いて、これら9件の研究報告からデータを抽出した。データ収集のための調査票はPetrosinoの先行研究(Petrosino 1997)を改変したもので、項目の一部は表「選択された研究」に掲げた。原著から、アウトカムに関する情報が欠けているときは、eメールないし通常の郵便で、原著者から分析のためのデータを入手する努力を行った。原著者は協力的だったが、当初入手できた以上のデータを見

つけることはできなかった。2件については、未公表の修士論文(Cook 1990; Locke 1984)を大学図書館から見つけたものの、求めている情報はなかった。

データ統合

コクラン共同計画の、統計ソフトウェアMetaView (Review Manager Version 4.1 (RevMan)の一部)を用いて統計分析を行なった。犯罪の二値変数のアウトカムはオッズ比、連続量によるアウトカムは重み付け平均差で表した。それぞれについて95%信頼区間を報告した。無作為実験の処遇効果を重み付けるに当たっては、固定効果モデルとランダム効果モデル、それぞれを仮定した。追跡期間については、半年以内、半年超1年以内、1年超1年半以内、1年半超2年以内、2年超のそれぞれについて効果を検討した。この後説明するように、メタ・アナリシスについては、「最初の効果」についてのみメタ・アナリシスを行なうことが可能だった。

これらの分析は、ニュー・イングランド・コクラン・センターの、Joseph Lau博士の開発したソフトウェアMeta Analystを用いてこれらの分析を繰り返し、さらに追加的な分析を行なった。著者の一人(John Buehler)は、エクセルを用いてメタ・アナリシスの計算式を作り、これらの3つの分析の結果をチェックした。結果は同じだった。

結果

全体としてみると、これら9件の研究はすべてアメリカ合衆国で行われたもので、うち2件(Yarborough 1979; Michigan D.O.C 1967)はミシガン州で行われたものである。2件以上の研究を行った研究者グループはなかった。年代は、1967年から1992年にわたっている。最初の5件の研究は未公表で政府の文書ないし博士論文として頒布されたもので、残りの4件は学術雑誌ないし書籍で公表されたものであった。研究参加者の平均年齢は15歳から17歳にわたっている。ニュージャージー州の研究(Finckenauer 1982)だけが、女子を含んでいる。9件の実験における人種構成は多様で、白人比率は36%から84%にわたっている。おおよそ1000(正確には946)の少年や若い成人が9件の実験研究に参加した。

研究の大半は、少年司法制度とすでに接触した、非行少年を対象としている。Vreeland (Vreeland 1981)の評価した、Texas Face-to-Faceプログラムを除き、全ての実験は単純な二群比較である。1件だけ、擬似無作為化の、参加者を交互に割り付ける手続きを用いている(Cook 1992)。その他の研究は、無作為化を用いたと述べているが、実際にどのように無作為化を行ったかは明瞭には記述されていない。テキサスの研究(Vreeland 1981)だけが、自己申告尺度のデータを持っている。2件の研究では(Cook 1992; Locke 1986)介入後の犯罪率が報告されていなかった。平均の犯罪率は報告されているものの、効果値の重み付け平均を計算するために必

要な標準誤差を報告していない研究もあった。追跡期間はまちまちで、3, 6, 9, 12, 24か月後の測定値が報告されている。

報告による知見の報告

報告されたデータそのもの、あるいは統計的有意度の尺度のいずれを用いても、9件の試験は、「スケアード・ストレート」をはじめとする少年の自覚を促すプログラムがその後の非行に対する効果があるというエビデンスを与えていない。

ミシガン州矯正局 (1967)

内部の未公表の文書で、ミシガン州矯正局は、判決を受けた非行少年に州少年院を見学させるプログラムの効果を報告している。残念なことに、報告書は恐ろしく簡潔である。60人の少年が、2時間の少年院見学をする群か、処遇を受けない群に、無作為に割付けられた。一回の見学には15人の少年が参加した。それ以外にプログラムについての記述はない。再犯は、少年裁判所に対する、新しい犯罪か、既存の保護観察命令に対する違反の、通報として測定されている。ミシガン州矯正局は、統制群の17%に比べ、実験群の43%が再犯したと報告している。このように大きな差があるのに、元の報告書では、奇妙なことにほとんど注目されていない。

THE GREATER EGYPT PLANNING AND DEVELOPMENT COMMISSION, アメリカ合衆国(1979)

1978年に、メナード矯正施設で始まったこのプログラムは、政治刑務所の生活を率直に具体的に描くものである。研究者は、13歳から18歳の161人の少年を無作為に、プログラムないし無処遇群に割り付けた。参加者は非行少年及び非行化する恐れのある少年の両方から成る。評価は、その後の警察との接触、2種的人格検査(Piers-Berne人格目録とJesness人格目録)の得点、親・教員・受刑者・他の少年に対する調査によって行われた。実験群の17%が再接触があり、12%は再接触がなく、同様に否定的な結果であるが、統計的には有意ではなかった(GERP&DC 1979)。著者は、すべての入手しうる知見に基づけば、少年による刑務所見学の継続や拡大を勧めることは誤っている。すべての実証的な知見は、肯定的な結果を示しておらず、実際、否定的さえ示している(p. 19)と結論している。研究者は、2つの態度検査(ジェスネス目録及び、ピエール・ハリス自己概念尺度)について、プログラムの効果がないことを報告している。一方、参加者、その両親及び教師は、に対する郵送・面談調査は、プログラムに対して全面的な支持を与えている(p.12)。また、囚人もまた自分たちの努力について、いかに肯定的で熱心であるかが報告されている。

ミシガン州JOLT研究, アメリカ合衆国 (Yarborough 1979)

JOLTプログラムには、ミシガン州の4つの群裁判所に係属した非行少年が参加した。一人一人の少年は、施設で計5時間を過ごした。その半分は、対決的な「の

のしり」セッションに費やされた。セッションの後、参加者は房に連れて行かれ、受刑者と直接交流した（例えば、嘲笑された）。227人の参加者について、犯罪に関するアウトカムが、3か月及び6か月追跡時点で収集された。この二つ目のミシガン州における研究は、介入群と統制群の間にほとんど差を認めなかった (Yarborough 1979)。しかしながら、プログラム参加者間の平均的な犯罪率は、0.69で、統制群は0.47だった。Yarborough (p. 14) は、「このプログラム、JOLTを受けた者は、統制群の者と比べて、良い結果を得ていないというのが、逃れようもない結論である」と結論している。

バージニア州INSIDERSプログラム, アメリカ合衆国 (Orchowsky and Taylor 1981)

Insidersプログラムは、脅迫的な言葉と成人刑務所の生活の生々しい描写を用いた、受刑者自身が運用する、対決的な介入として記述されている。少年は、15人ずつ居房に収容され、日課について看守から説明を受けた。その後、受刑者による、2時間の「のしり」セッションを受けた。参加者は、バージニア州の3つの裁判所から送られた非行少年である。研究者は、非行のため2回以上の判決歴がある、13歳から18歳の80人の少年を、Insidersプログラムか無処遇の統制群に、無作為に割り付けた。OrchowskyとTaylorは、6、9、12か月後のさまざまな犯罪指標について報告している。統計的には有意ではないが、唯一の肯定的な知見は、バージニア州で報告されている (Orchowsky 1981)。6か月後の差は統計的に有意ではないものの (統制群の39%、実験群の41%が新たな裁判所係属があった)、9か月後、12か月後には、実験群に有利な結果が出ている。しかしながら、研究者は、実験群における脱落が極端に大きいと述べている。9か月後の時点で、42%が脱落しており、12か月後の時点で55%が脱落した。研究者は、残った群についても、いくつかの要素について依然として比較可能であることを示すように思われる分析を行なっている。

テキサス州FACE-TO-FACEプログラム, アメリカ合衆国 (Vreeland 1981)

Face-to-Faceプログラムは、少年が受刑者として13時間を過ごす、オリエンテーションプログラムである。オリエンテーションの後、カウンセリングが行われる。参加者は、ダラス郡少年裁判所で保護観察命令を受けた、15歳から17歳の少年で、研究開始前に平均して2から3回の犯罪歴がある。160人の男子少年が、刑務所のオリエンテーションとカウンセリング、オリエンテーションのみ、カウンセリングのみ、いずれもなしの4つの条件に無作為に割付けられた。Vreelandは、6か月後に、公的な裁判所記録と自己申告非行を評価した。Vreelandは、統制群の参加者が3つの実験群よりも公的の非行についてより良い結果を出している (統制群の28%が非行を行ない、一方、刑務所のオリエンテーションとカウンセリングを受けた群が39%、刑務所のオリエンテーションのみの群が36%、カウンセリングのみの群が

39%) ことを報告している。公的非行というこのもっとも頑健な尺度を用いた場合とは矛盾した結論となっているが、自己申告非行尺度から得られたデータは処遇群は処遇を受けなかった統制群よりも良い結果であったことを示唆している。ただし、これらの知見は、いずれも、統計的有意には達していない。すべてのデータを見て、Vreeland は、Face-to-Faceプログラムが有効な非行防止プログラムであるというエビデンスはないと結論している。「法に従う態度尺度」を含む、いくつかの態度尺度についても、プログラムの効果を見出されていない。

ニュージャージー州「スケアード・ストレート」プログラム, アメリカ合衆国 (Finckenaer 1982)

ニュージャージー州の終身刑受刑者のプログラムは1975年に始まったもので、11歳から18歳の少年を「ののしり」セッションに参加させ対決することを重点としている。Finckenaerは、非行少年でない者を含む、81人の少年を無作為にプログラムないし処遇を受けない群に割付けた。その後、行動を評価するため、裁判所記録を用いて、社会内において6か月間、彼らを追跡した。Finckenaerはニュージャージー州で「スケアード・ストレート」に参加した児童及び若者の41%が新たな犯罪を犯している一方、統制群についてはわずか11%であることを見出した。この差は統計的に有意であった (Finckenaer 1982)。また、彼は、プログラムの参加者のほうがより重大な犯罪を犯しており、「犯罪に対する態度」を例外として9つの態度尺度についてプログラムは影響を与えないことを報告している。この尺度では、実験参加者のほうが、統制群よりもより悪い結果であった。Finckenaer's 自身が懸念している無作為化の完全さに関する問題は、このあとで報告する感度分析で取り扱う。

カリフォルニア州SQUIRESプログラム, アメリカ合衆国 (Lewis 1983)

これは、1964年に始まった、アメリカ合衆国ではおそらくもっとも古いプログラムである。SQUIRESプログラムは、カリフォルニア州の2つの郡の、その大半が複数回の逮捕歴がある、14歳から18歳の男子少年を対象に行われた。介入は、言葉遣いの荒い、対決的な「ののしり」セッション、受刑者との直接的な交流を含む刑務所の案内付き見学、刑務所の暴力を描いた映画の視聴などを含んでいる。介入は、1週間に1回、3週間にわたって行われる。「ののしり」セッションは3時間で、通常、20人の少年を対象とする。研究では、108の参加者が無作為に処遇ないし無処遇の統制群に割付けられた。Lewis は、12か月後の7種の犯罪アウトカムについて参加者を比較した。Lewisは、プログラム参加者の81%が逮捕された一方、統制群は67%だったと報告している。彼は、また、プログラム参加者のうち、非行の進んだ少年に悪影響が出ていることを見出し、そのような児童や少年は、「SQUIRES のような短期のプログラムでは進んでいる向きを変えることはできず、…非行リスクの高い少年についての結果はSQUIRESは場合によって有害であることを示唆している。」 (p. 222) と結論している。プログラムの唯一の抑止効

果は、再逮捕までの平均期間で、実験群については4.1か月、統制群については3.3か月であった。8つの態度尺度についてデータが報告されているが、Lewis はすべての尺度について実験群のほうが良い結果であると報告している。これは、非行少年の態度を良い方向に変えることができたとしても、行動の変化を達成することの難しさを改めて裏書きしている。

カンザス州「少年教育プログラム」、アメリカ合衆国 (Locke et al 1986)

この介入は、法律及びそれを破った結果について児童を教育することを目的としている。プログラムは、少年と受刑者を、人格タイプに基づき、大雑把ながらマッチングさせようと試みた。3つのカンザス州の群の14歳から19歳の52人の非行少年が、少年教育プログラムを受けさせる保護観察命令群か、処遇を受けない統制群へと割付けられた。研究者は、6か月後に、(警察及び裁判所から入手した) 公的記録と自己申告により、犯罪アウトカムを評価した。Lockeと彼の同僚は、「少年教育プログラム」について効果がなかったと報告している。実験群も統制群も、事前測定から事後測定にかけて向上したが、研究者は、測定したいずれの犯罪尺度についても、両群に差はなかったと結論している。Jesness 検査及びCerkovich検査の二つの態度検査についても、プログラムの効果はなかったと報告している。

ミシシッピ州PROJECT AWARE, アメリカ合衆国 (Cook and Spirrisson 1992)

Project Awareは、受刑者によって運営される、5時間のセッションによる、非対決的な教育プログラムである。介入は、6人から30人のグループの少年に対して行われる。研究では、郡裁判所に係属する、12歳から16歳の176人の少年が、無作為にプログラムないし無処遇の統制群に割付けられた。実験群と統制群は、12、24か月後に、裁判記録から得られた犯罪アウトカムについて比較された。研究の実験群と統制群の参加者の間にほとんど違いは認められなかった。例えば、統制群の12か月後の平均犯罪率は1.25であるのに対し、Project Awareの参加者は1.32だった。いずれの群も、12から24か月後にかけて向上したが、統制群の平均犯罪率は実験群よりも低かった。研究者は、「処遇プログラムへの参加は、その後の犯罪の頻度と重大さに有意な効果を与えなかった」(p. 97)と結論している。研究者は、また、二つの教育的尺度、「学校への出席」と「中退」についても報告を行なっている。興味深いことに、プログラムの中退に対する効果を報告しているにもかかわらず、「プログラムが中退率を下げるのに効果があったかどうかははっきりしない」(p.97)と報告している。

これらの研究を信用してよいか。方法面での質の吟味

先述した4つの基準に沿って、一つ一つの研究について、方法面の質を吟味した。考慮に値すべき、方法面での問題を報告している3件の報告を見出した。こ

のうち2件は、この後に行なう統計分析にも影響を与えている。

1) 無作為化の完全性

a. 1件の研究がランダム割付けについての問題を報告しており、その問題は非常に大きい(Finckenauer 1982)。問題を起こした少年あるいは非行少年を送致する、参加機関の11機関のうち5機関しか、正しく割付けを行わなかった。Finckenauerは、無作為化に対する違反を補正するため、追加分析を行っているが、この追加分析においてもプログラムは有害であった。この研究をメタ・アナリシスから外し、結果への影響を見るため、感度分析を行なった。

b. 表「選択された研究」には、割付けの隠蔽に関する評価も含まれている。7件の研究については、どのように無作為化が行われたかが報告されていないため、「不明」と評価されている(B評価)。1件については、隠蔽は「A」すなわち「適切」と評価された(Michigan D.O.C 1967)。もう1件については、交互割付けが用いられているため、コクランレビューワハンドブックに従い、「不適切」と評価されたため、「C」が与えられた(Cook 1992)。最後の研究は、介入後の犯罪データが得られなかったため、メタ・アナリシスに含まれなかった。

2. 当初の標本からの脱落

a. バージニア州のInsiders研究だけが、当初の無作為割付け標本からの参加者の重大な減少を報告している(Orchowsky and Taaylor 1981)。報告によれば、脱落は、第二追跡時点までと第三追跡時点までに生じている(6か月後の、第一追跡時点までには生じていない)。他の研究を見ると、介入後の初回の追跡時点を超えてデータを持つ研究がほとんどないので、「初回効果」のみを用いてデータを統合する分析を行うこととした。よって、それ以降に脱落が起きたことの影響に関する感度分析は行われなかった。

b. ミシガン州のJOLT研究は、多くの参加者が実際には参加しなかったと報告し、分析からこれらの参加者を除いている。問題は、そもそも何人の参加者が割付けられたかが分からず、また、研究者から、残った標本が当初の標本とどの程度類似しているかについて保証が与えられていないことである。この研究も感度分析の際に外して、統合分析に対する影響を見た。

3. アウトカム評価者の盲検化

a. アウトカム評価者に対する盲検化を報告している研究は1件(Michigan D.O.C 1967)あるが、大半のアウトカムデータは、(プログラムの立案者によってではなく)州ないし連邦の犯歴データベースから収集されているため、この問題は結論に対する脅威とは思われない。

4. プログラムの実施の忠実さ

a. これらのプログラムは比較的単純なので、実施(すなわち、少年が本来得るべきものを得ているかどうか)に関する問題を報告している研究者はなかった。

メタ・アナリシス

一つ一つの研究について、関連した犯罪アウトカムすべてのデータを抽出した。プロトコルでは、(政府の行政記録による)公的データは、(研究者自身が質問紙によって実施した)自己申告犯罪とは、別個に吟味するというかたちで、分析を実施しようと考えていた。さまざまな犯罪尺度が報告されていることを予想していたため、プロトコルでは、政策及び実務に有用な4つの指標にまとめて分析を行おうと考えていた。すなわち、犯罪者率(それぞれの群の何%が再犯したか/しなかったか)、平均犯罪件数(それぞれの群における一人当たりの犯罪等の事件数)、犯罪の悪質度(それぞれの群における犯罪の平均的重大さ)及び再犯までの期間(それぞれの群における再犯ないし失敗までの平均期間)である。残念なことに、表2に示すように、データを一覧にしてみると、これらの指標の多くは欠けていることが分かった。

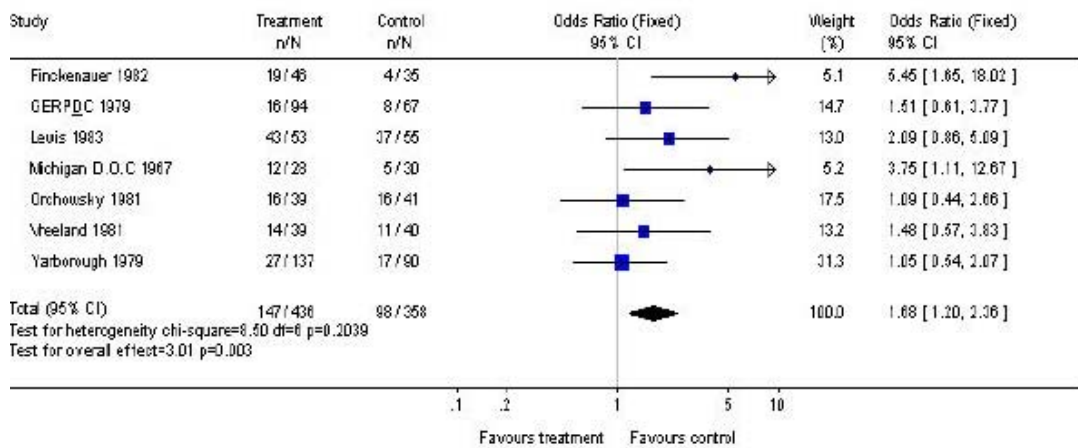
データに制約があるため、メタ・アナリシスは一つの指標についてのみ行った。すなわち、プログラム終了直後、すなわち、(通常、唯一、報告である)最初の追跡時点での、公的尺度における犯罪アウトカムについて報告を行う。平均を報告している研究が多くなか、しかも標準偏差を報告している研究が少なかったため、分析では、比率データ(それぞれの群における再犯者の比率)に着目した。つまり、データは二値のアウトカムであるので、分析では各研究のオッズ比及びその95%信頼区間を報告する。文献をみるとモデル選択には意見の一致がみられないので、分析では、研究の処遇効果のモデルとして、ランダム効果モデル、固定効果モデルをそれぞれ仮定する。

図1及び図2 再犯者率に対する処遇直後の効果:公的尺度

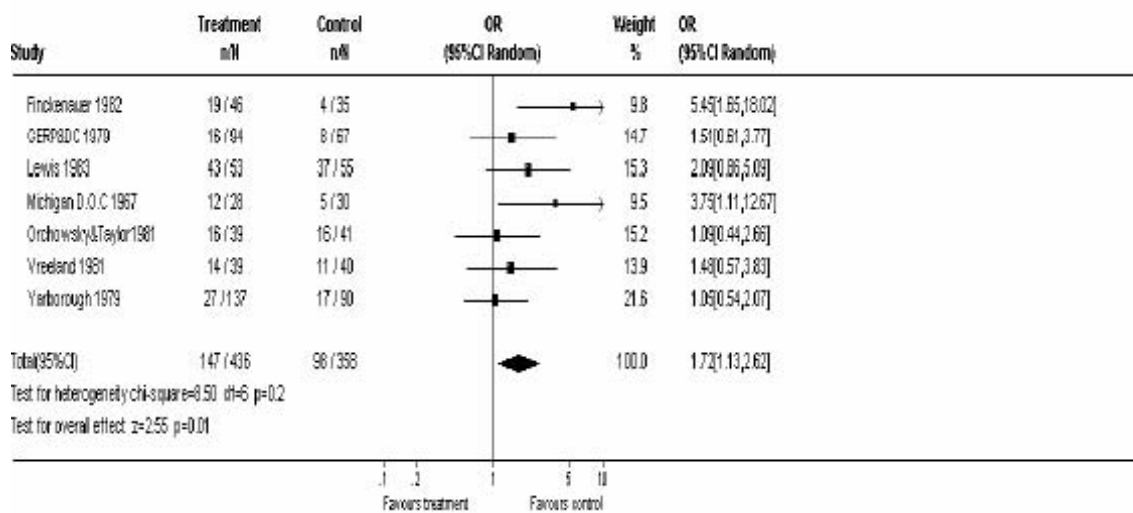
再犯率を報告している7つの研究を比較した表1のデータを分析したところ、介入は最初の追跡時点での犯罪・非行を増加させていることが見出された。固定効果モデルを仮定しようとランダム効果モデルを仮定しようと、全体としての、否定的な効果は変わらなかった。固定効果モデルを用いると、オッズ比は1.68(信頼区間1.20-2.36)であり、ランダム効果モデルを用いると、オッズ比は1.72(信頼区間1.13-2.62)と大きくは変わらなかった。いずれも、統計的に有意であった。介入は、犯罪を行うオッズを、1を基準とし、1.6から1.7倍に増加させる。

固定効果モデルの結果

Review: "Scared Straight" and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency
 Comparison: 01 Intervention versus Control, Crime Outcome
 Outcome: 01 Post-intervention - group recidivism rates - official measures only (fixed effects)



ランダム効果モデルの結果



n : 再犯を犯した参加者の数 ; **N** : グループに割り付けられた人数 ; **OR** : オッズ比 ; **CI** : 信頼区間 ; **Weight** : 分析中, 研究に与えられた重みの大きさ

図2 Finckenauerの研究を除外した感度分析

Finckenauerの研究は無作為化に関して問題があったため、図1及び2に報告した分析から除外した。固定効果モデルを仮定しようとランダム効果モデルを仮定しようと、オッズ比に大きな違いがなかったため、ランダム効果モデルを仮定してメタ・アナリシスを行った。Finckenauerの研究が最大の否定的効果を報告していたため、オッズ比が小さくなったのは驚くに値しないが、1.47と、依然として否定的で、統計的に有意(信頼区間1.03-2.11)であった。

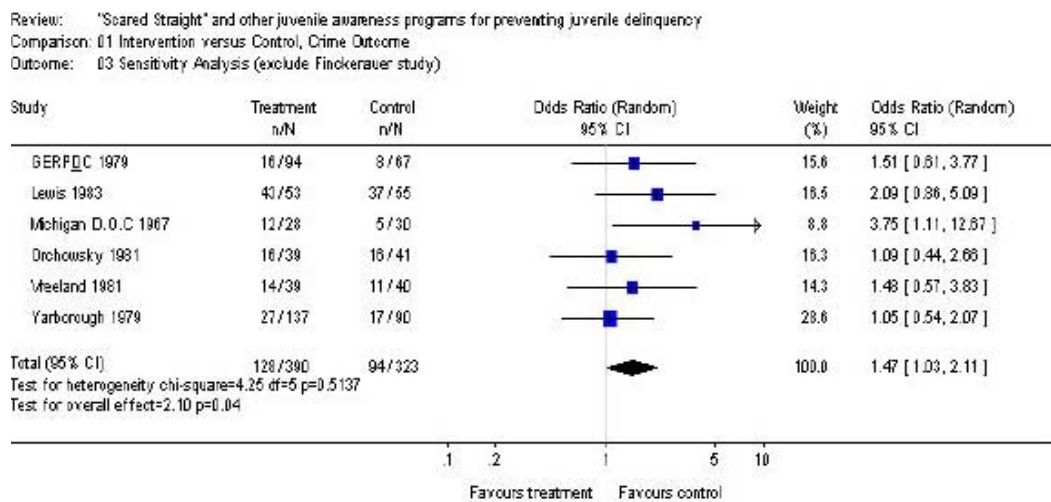


図3 Yarboroughの研究を除外した感度分析

Yarboroughの研究は不参加者を除外しており、当初の標本からの大きな脱落がある可能性があったため除外した。ここでもランダム効果モデルを仮定した。この研究を除外しても、全体として、これらのプログラムが否定的な効果を持っていることは変わらなかった。つまり、オッズ比は1.96で、統計的に有意(信頼区間 1.25-3.08)であった。

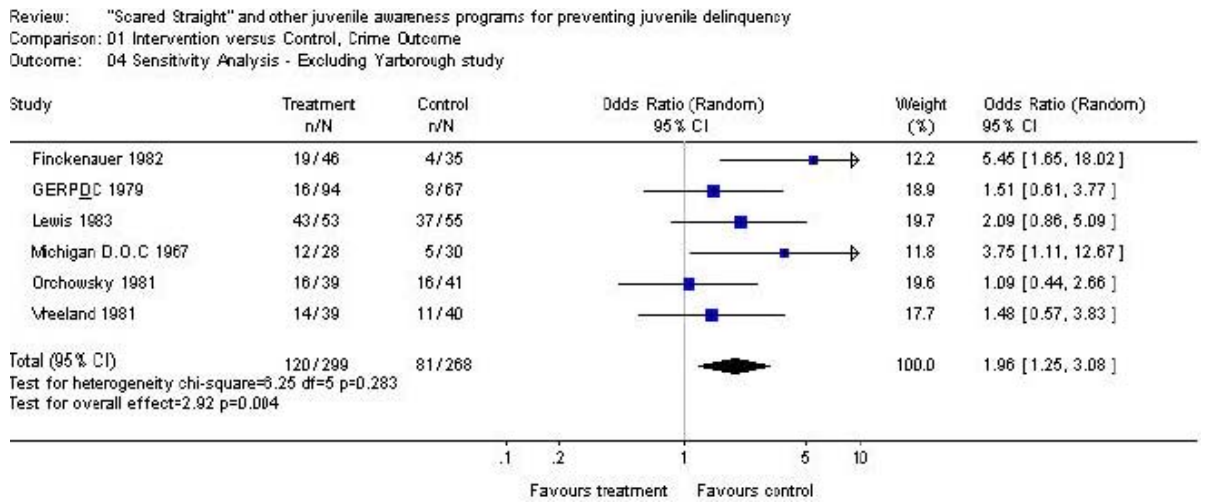
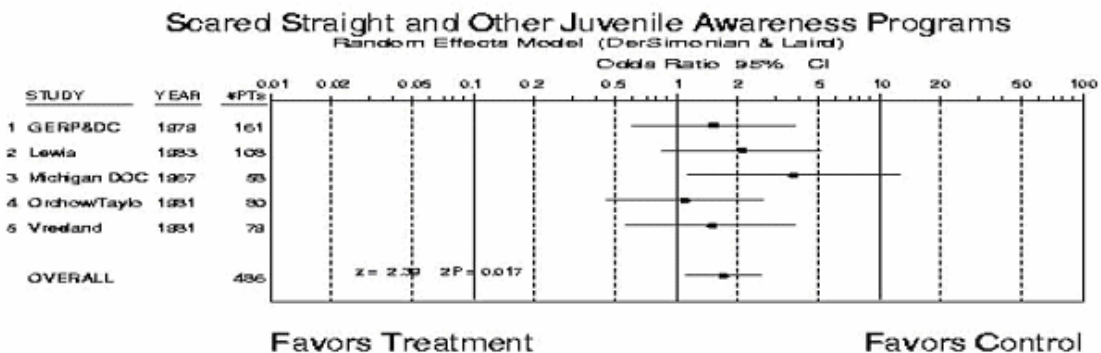


図4 Finckenauerの研究とYarboroughの研究を除外した感度分析

Finckenauerの研究とYarboroughの研究を除外し、これが全体のメタ・アナリシスに対して影響を与えるかどうかを見た。図が示すとおり、感度分析のために研究を二つ除外したとしても、残りの5件の研究における介入の全体効果は「犯罪化を促進する」効果（つまり、スケアード・ストレートを受けなかった統制群が有利となる効果）を示した。



収束するエビデンス

メタ・アナリシスを行うために必要な犯罪者率を報告していなかったため、メタ・アナリシスに含めることができなかった二つの研究もまた、介入に効果がなかったことを報告している(Cook and Spurrison 1992; Locke et al 1986)。実際、ミシシッピ州の研究の平均値

はプログラムが有害な方向に働いていることを示しており、カンザス州の研究者は（実際の数字は報告していないものの）自己申告データが否定的な影響を示していることを報告している。

これらの知見は、スケアード・ストレートを、より広範なメタ・アナリシスの一部として含む、過去の系統的レビューにも反映されている。2000年には、ヨーク大学のNational Health Service Centre for Reviews and Disseminationが「広範囲公衆保健プロジェクト報告書」(Wider Public Health Project Report)を作成した。このプロジェクトは、政府の広範囲な公衆保健に関する政策課題について、精力的に、系統的（あるいは系統的と思われる）レビューを収集し、注釈を付けるというプロジェクトである。犯罪行動に関連するレビューも含んでいる。これらのレビューについて、本レビューと、エビデンスが、一致しているかいないかを吟味することとした。そのようなレビューには2件あった。

Lipseyによる少年の非行防止及び処遇プログラムのメタ・アナリシス(Lipsey 1992)は、11件の「ショックを与えるための収容」及び「スケアード・ストレート」プログラムの効果を「-0.14」と報告している。短く言えば、再犯率を50%とすると、実験群の再犯率は統制群よりも7%高いということである。

Gendreauとその同僚(1996)もまた、「より厳しい」あるいは「より抜け目ない」制裁についてのメタ・アナリシスを報告している。これらには、「スケアード・ストレート」のように将来の犯罪を抑止しようという介入もあれば、保護観察や仮釈放中の集中的監視のよういより少ないコストで犯罪者を罰したり管理したりしようという介入もある。レビューは、プログラムへの参加と再犯結果の相関係数を計算した。「スケアード・ストレート」のタイプの15件の実験及び擬似実験による評価を吟味し、再犯率との相関係数は、「0.07」（これは、彼らの研究で最大の大きさ）であることを求めた。単純に言って、プログラムへの参加は犯罪の増加と関連している。

討論

25年間にわたり、8つの異なる司法管轄地域で行われた、これらの無作為化実験は、「スケアード・ストレート」及びその他の「少年自覚」プログラムは、それだけでは、犯罪防止対策としては、有効でないことを見出した。より重要なことは、これらの研究は、実験条件の下では、この種のプログラムは、それを受けた少年が将来犯罪を犯すオッズを高めるとい、実証的エビデンスを提供していることである。用いられた介入のタイプは、厳しく対決的なものから施設の見学まであり、一様ではないものの、結局、処遇を受けない統制群に比べ実験群の犯罪性が増加するという、同じ結論に至っている。何もしないほうが、少年をプログラムに参加させるより良かったのである。メタ・アナリシスに用いられた7つの

実験が、この介入を異なる形態で実施した6つの司法管轄地域で行われたことは、このメタ・アナリシスが高い外的妥当性を持つことを示唆している。

これらのプログラムが有害な効果を持つという強力な結論は、政策決定者にジレンマをもたらす。刑事司法上の介入は、有害な場合、単に参加者にとって有害であるというわけではない。こうした介入は、単に何もしない場合と比べ、「余分な」犯罪被害を作り出すことによって、一般市民に不幸をもたらすからである。政策決定者は、それぞれの司法管轄において、まさに自分たちが援助しようとしている市民に対して、刑事司法上の介入が害をもたらさないようにするため、それらを厳密に評価しうる研究体制を作る努力をしなければならない。

「なぜ」という問い

なぜ「スケアード・ストレート」と同様のプログラムは参加者の犯罪を減らすのではなく増やすのかという疑問が生じてくる。何が根本的なメカニズムなのだろうか。なぜある試みが有効なのかあるいは無効なのかを理解することは、評価者、プログラムの立案者、そして、犯罪学の理論家の、大きな関心の的である。オクラホマ州の‘Speak Outs’プログラムの評価者は、なぜこのプログラムが犯罪を増加させる効果があるのかについて自問している。

2時間の見学が社会的に受け入れられない行動を抑止するという奇跡は起こせないという議論が行なえるのであれば (Cook & Spirrisson, 1992を見よ), 同様に, 2時間の見学が社会的に受け入れられない行動を「引き起こす」という奇跡を行なえると主張するのもあまりにも単純であるという議論ができる (Holley and Brewster 1996)。

これらのプログラムがなぜ有害な結果をもたらすかについては、多くの優れた事後的な説明があるが、評価研究は、この疑問に、系統的レビューを用いて実証的な答を与えるために必要な、媒介変数や「因果モデル」を提供できるように、工夫された評価研究はなかった (Petrosino 2000)。

レビューワの結論

実務への示唆

私たちは、以下の「皮肉」を指摘しなければならない。このメタ・アナリシスやその他の研究が暗い知見を報告しており、1992年以降新しい無作為化実験は行われていないにもかかわらず、「スケアード・ストレート」とその派生プログラムは相変わらず用いられている。Finckenauer and Gavin (Finckenauer and Gavin 1999)が述べているように、カリフォルニア州のSQUIRESプログラムの否定的結果が発表された際、プログラムではなく、評価をやめようというのが反応であった。SQUIRESプログラムは、受刑者と参加者の証言によっ

て評価され、現在まで続いている。エビデンスに反した、プログラムの効果に対する信頼が引き続いているのだ。ミドルトンとその同僚は、この手法が、イギリスのある町において、退職した矯正職員を用いて、公立学校に刑務所的な雰囲気を作り出し、一般の生徒を脅かそうという形で拡張されたことを報告している (Middleton 2001)。1982年に、Finckenauerは、この現象を「万能薬現象」と呼び、政治家、実務家、メディア記者などが、困難な社会問題の解決策として、簡単で短期で安価な救済策にどのように飛びつくのかを述べている (Finckenauer 1982)。プログラムその自体ではほとんど価値がないが、多要素からなるトータルな介入のパッケージの中に組み込まれば有用であるという主張もある。私たちは、このレビューの結果、現在、このようなプログラムを行っているないし行おうとしている司法管轄区域は、行っていないし行おうとしているプログラムが、本レビューが研究したプログラムと異なっていることを示す責任があると考えます。つまり、介入によってなんらの害もたらされないことを示すために厳密な評価を行わなければならない。

文献によっては、このプログラムが、プログラムを提供する受刑者に対して及ぼすプラスの効果を指摘し、それをもってこのプログラムの利用を正当化するという主張を行うものがある。このような主張は、明らかに、プログラムが無害であるという前提に立っている。本レビューの知見に照らせば、本来の目標以外のものを達成していることを理由に、「スケアード・ストレート」及び同様のプログラムを用いるべきだという主張は、隠れた目標を達成するために少年を犠牲にして良いという、倫理的な疑問を引き起こすことになる。

個人的な後悔と償いは高貴な目標であり、矯正施設はこの目標を勧奨する仕組みの一つである。矯正施設の管理者は、少年(及び少年が住む地域社会)に対して害を及ぼさない慈善的な活動に、意欲のある受刑者を参加させることができる。受刑者は(入院している子どもにおもちゃを作るといった)多くの社会奉仕的な活動に参加しており、こうした活動は、単に「役に立つ」と理由だけではなく、そのような活動が犯罪者の更生に寄与する部分があるという理由で、勧奨されるべきである。

受刑者にとって、もう一つの興味深い機会は、お互いにカウンセリングをしたり、勉強などを教えあったりすることである。たとえば、Franklin (2000)は、教育程度の高い受刑者を、読むことのできない受刑者のための識字教育の指導者として用いているワシントン州の矯正施設のプログラムを報告している。このように貢献できることは、費用が少なくてすむことも加え、プログラムの良い点として挙げられている。

著者は少年の自覚を求めるプログラムを用いている、さまざまな刑務所から連絡をもらった。プログラムを続ける理由の一つは、ここで報告されている研究は、自分たちのプログラムには当てはまらないというものだった。私たちは、施設、地域、あるいは、国レベルの矯正研究組織が、プログラム担当者とともに、厳密な評価を行なうべきだという助言を行った。もし、そうした研究組織が存在しない、あるいは、自力では研究が行なえないのであれば、このプログラムが本当に計画したとおりの効果を上げており、意図と反して得

ではなく害をもたらしていないかを確認するため、地域の大学や研究コンサルタントと協力するよう助言した。

刑務所の管理者は、しばしば、私たちの研究結果が、自分が運営しているプログラムに当てはまるかどうかを尋ねてきた。たとえば、プログラムを運営している受刑者が、塀の外に出て学校で自分の人生経験を話すことがある。私たちのレビューは、「子どもが刑務所を訪問する」プログラムだけを対象としており、私たちの知るところ、犯罪者が刑務所の敷地を離れ学校で児童に話す形態の、少年自覚プログラムについて吟味したレビューはない。これまでのところ、このようなプログラムを評価した統制研究は見つけていない。

このレビューがインターネット上で閲覧可能になってから、一般市民から、法に触れた少年をどのようにして「スケアード・ストレート」プログラムに入れたらよいかという問合せをときどき受けるようになった。彼らは、明らかにレビュー全文を読んでおらず、単にプログラムの連絡先を知ることだけを目的としていた。しかしながら、このプログラムを勧奨するのは良心に反する。「スケアード・ストレート」及び同種のプログラムが助けとなるであろうタイプの児童や人格特性についてはデータがない。このような善意の市民に対しては、国や地域で、少年の非行防止サービスを専門としている機関を紹介することである。

研究への示唆

キャンベル共同計画及びコクラン共同計画のガイドランに従い、新たな研究ないし重要な批判に応じて、24か月以内に、本レビューを更新する計画である。本レビューでは、9件(そして、そのうち、メタ・アナリシスに用いたのは7件)の研究しか見出せなかったことを踏まえ、追加分析においては、調整変数を用いることについては慎重であった。しかしながら、プログラムの要素のうち、受刑者のプレゼンテーションの過激さの程度は、重要な影響をもたらしている可能性があるとして、当初から考えていた。つまり、プレゼンテーションが、より残虐で下品なものであるほど、抑止したい行動を少年にかえって身に付けさせてしまうという一種の「逆効果」が生じている可能性がある。この点についてもう少し丁寧にみていったところ、プレゼンテーションを持たない少年院の見学に関する実験が、最大の有害な効果を報告している(Michigan Department of Correction 1967)ことを見出した。少年の自覚を促すプログラムに関し、この変数についての記述がなされた、より多くの実験が報告されない限り、この点について追究する予定はない。

このレビューを行なった結果、助成が得られれば、次の2点についてさらに探求するの必要を感じた。「衝撃の値打ち」タイプの介入は多くの分野で行なわれている。例えば、飲酒運転を防ぐため、高校生は、しばしば、痛々しい交通事故の映像を見せられることがある。技術科の授業では、安全眼鏡を掛けていない場合、何が起きるかの映画を見せら

れる。通常、非常に生々しく、規則を守らせることを目的としたものである。このような例はさまざまな分野にある。これらの「衝撃の値打ち」タイプの介入は有効なのだろうか。あるいは、ここで報告したのと同様、期待を裏切り、有害ですらある結果をもたらすのだろうか。

スケアード・ストレート等のプログラムは、少年が実際には実現しないとしか思わない、ただの脅ししか意味しないので無効なのだという考えは本当かもしれない。実際に刑罰が実施された場合の抑止に関するエビデンスはどうだろうか。少年法廷における公的手続きの効果に関する無作為化試験にはさまざまなもの(例えば、手続きからのダイバージョン)がある。実際の公的制度が、脅しを実行した場合、将来の犯罪行動を抑止するというエビデンスはあるのだろうか。

また、広範な文献探索を行ったため、刑事司法上の介入に関し、異なる評価デザインを用いることの効果を、より深く検討することができた。現時点で、「スケアード・ストレート」に関する実証研究に関する良くそろったコレクションを持っており、これらには、多くの非無作為実験が含まれている。さまざまな異なるデザインごとに結果を比較するという計画を先送りしたが、この点については他の研究者が取り組むことを期待している。

結論

フィラデルフィアで最も成功しているラジオ局(B 101 FM)の会長であり、慈善事業家としても知られる、ジェリー・リーは、ビジネスにおいて競争相手よりもより多く研究を活用していると述べている。彼は、自らのラジオ業界における大きな成功の理由に研究の活用を挙げている。彼は、「研究は抽象的なものではない。…今後起こることについての確率を与えてくれる。」という肝心のポイントを述べている。

「スケアード・ストレート」等少年の自覚を促す実験は既に行なわれてきたが、このタイプのすべてのプログラムがうまくいかない、あるいは、さらに悪いことに、少年参加者に有害な結果をもたらすとはとは言い切ることはできない。しかし、過去のエビデンスは、このプログラムは有害である確率のほうがそうでない確率より高いことを示している。

あなたは、医師に、このプログラムと同様の研究結果が示されているのと同じ治療を、我が子に処方してもらいたいとおもうだろうか。

本研究の引用／利用

引用

Washington Post 2001
San Francisco Chronicle 2001
National Academy of Sciences Report, Juvenile Crime/Juvenile Justice, 2001

The Economist, 2002
Prison Journal, 2001
Journal of Offender Rehabilitation, forthcoming
National Institute of Justice Journal, forthcoming
Penn GSE Research Update, 2003
Harvard Psychiatry Letter, 2003
Ockham's Razor, "The Science of Crime Control," Australian Public Radio
Handbook of Practical Program Evaluation, forthcoming

活用

研究者 Sally McIntyre が、無作為化実験に対する研究助成を求めるため、上院での証言において用いた (2001年)

研究者 John Middleton が、一般の学校生徒による違法行為を防ぐために「刑務所的管理」を学校に導入しようとする試みを思いとどまらせるため、内務省に対する説明において用いた

研究者 Lawrence Sherman が全米学術会議のワークショップにおけるプレゼンテーションで、厳密な評価により多くの投資すべきであると述べた際に用いた (2003年9月)。

ブリストル大学、コ克蘭・ノルディック・センター、アメリカ犯罪学会などにおける、系統的レビューのための研修において、研究者によって用いられた

謝辞

この研究は、主として、ペンシルベニア大学教育学大学院 (代表者 Robert Boruch) に対する、スミス・リチャードソン財団による5000ドルの助成により支えられた。また、全米学術会議評価センターの「児童のための先進的取り組み」プログラム (代表者 Frederick Mosteller) に対するメロン財団の助成、イギリス内務省からのケンブリッジ大学への助成 (代表者 David Farrington) からも部分的に援助を受けた。下記の二つの助成は、Anthony Petrosino の労働時間と、全米学術会議におけるオフィスとコンピュータの利用に充てられた。

この更新は、ペンシルベニア大学ジェリー・リー犯罪学センターに対するスミス・リチャードソン財団の助成 (代表研究者 Lawrence Sherman) による支援を受けた。

ラトガース大学の「法と正義センター」の刑事司法コレクションと、ハーバード大学教育学大学院のガットマン図書館は、図書館相互貸借依頼を援助してくれた。Phyllis

Schultze とCarla Lillvikの専門性, 忍耐, 助力に感謝する。

私たちは, コクラン発達・心理社会・学習障害グループの大きな援助に感謝する。これには, Dr. Jane Dennis (レビュー・グループ・コーディネータ), Professor Geraldine Macdonald (コーディネイティング・エディター) による, 指導とコメントを含み, さらに, Dr. Julian Higgins, Dr. Stuart Loganを始めとする, 発達・心理社会・学習障害グループのメンバーによるコメントに感謝する。Jo AbbotとCelia Almediaにより提供された, 検索の追加をはじめとする, その他の手助けにも感謝する。

この論文は, Professor Robert Boruch, Sir Iain Chalmers, Dr. Phoebe Cottingham, Professor Lyn Feder及びProfessor Joan McCordによるコメントと批判からも多くを得た。

Professor Boruchは, キャンベル共同計画版のこのレビューのアドバイザを務めた。また, キャンベルレビューの編集過程において批判を下された3名の審査者の批判にも感謝する。

この更新は, Professor Hiroshi Tsutomiによる編集上のコメントにより大きく改善した。

ありうべき利害の矛盾

二人の著者は, 初期の分析に基づき, 雑誌Crime & Delinquencyに有害な効果を示唆する論文を掲載している (Petrosino 2000b)。Crime & Delinquency誌に発表した結果を「再現」しようとする方向へのバイアスの可能性は, 本レビューで, 明確で透明な方法を用いたことにより, 打ち消したと考えている。

助成元

外部からの助成

- ・ アメリカ合衆国・スミスリチャードソン財団による (ペンシルベニア大学への) 研究助成 (代表研究者 **Robert Boruch**)
- ・ アメリカ合衆国・メロン財団による (全米学術会議・評価センター) への研究助成 (代表研究者 **Frederick Mosteller**)
- ・ イギリス・内務省研究統計部の (ケンブリッジ大学犯罪学研究所) への研究助成 (代表研究者 **David Farrington**)
- ・ アメリカ合衆国・スミスリチャードソン財団による (ペンシルベニア大学ジェリー・リー犯罪学センターへの) 研究助成 (代表研究者 **Lawrence**)

Sherman)

内部からの助成

- ・ アメリカ芸術科学アカデミー (1999-2002)
- ・ アメリカ合衆国ハーバード大学教育学研究科 (1999-2002)

この研究に基づいて公表された (される予定である) 論文

Petrosino Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino, James O. Finckenauer. 2000. Well-meaning programs can have harmful effects! Lessons from experiments in Scared Straight and other like programs. *Crime & Delinquency* 46: 354-379.

Petrosino A , Turpin-Petrosino C, Buehler J. "Scared Straight" and other juvenile awareness programs for preventing juvenile delinquency (Cochrane Review). In: *The Cochrane Library*, Issue 4, 2003. Chichester, UK: John Wiley & Sons, Ltd.

Petrosino, Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino and John Buehler. 2003. The effects of Scared Straight and other juvenile awareness programs on juvenile delinquency: A systematic review of the randomized experimental evidence. *Annals of the American Academy of Political and Social Science* (September):

Petrosino, Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino and John Buehler (forthcoming). "Scared Straight and Juvenile Awareness Programs." In Brandon Welsh and David Farrington (eds.) *What Works?* Wadsworth Publishing.

Synopsis: January 2003, Diane Mueller, Evidence-based Nursing

表

1 選択された研究の特徴

研究	Cook 1992
手法	擬似無作為化
参加者	研究者が裁判所のファイル番号を付けすべての奇数番号を介入群に割付 ミシシッピ郡裁判所の, 12歳から16歳の非行少年176人
介入	白人36%, 男子100% 教育的 受刑者が, 非対決的な5時間のセッションを運営。
結果	公的な裁判所のデータ(平均犯罪件数及び犯罪の重さ)
注	学校の出席状況と中退 平均値とともに, 標準偏差が報告されていない。 著者及び他の主要文献から, これらのデータは入手不能
割付の隠蔽	C(不適切)
研究	Finckenaue 1982
手法	無作為割付け
参加者	11歳から18歳の非行少年ないし非行化するおそれのある少年 非行歴あり50%, 白人40%, 男子80%
介入	訪問1回 およそ3時間続く, 終身囚による, 対決的な「ののしり」セッション
結果	公的な通報, 逮捕, 処分の6か月間の追跡 犯罪の重さ 態度 <ul style="list-style-type: none"> — 犯罪者に対する — 犯罪に対する — 法に対する — 司法に対する — 警察に対する — 刑務所に対する — 刑罰に対する — 自己イメージ
注	
割付の隠蔽	B(不明)
研究	GERP&DC 1979
手法	無作為割付け

参加者	非行少年ないし非行化する恐れのある少年161 人 男子100%, 白人84%, 年齢 13-18歳
介入	受刑者と対決的な「ののしり」セッション
結果	警察との接触の5から15か月間の追跡 Piers Harris 児童自己概念尺度 Jesness 人格目録
注	
割付の隠蔽	B(不明)
研究	Lewis 1983
手法	無作為割付け
参加者	カリフォルニア州の二つの郡の108人の非行少年 大半は大幅な前歴がある 年齢は14-18歳男性100% 大半は非白人
介入	全部で3回の訪問(1週間1回)で, 対決的な「ののしり」セッション, 刑務所の案内付き見学, 受刑者との交流, 刑務所の暴力に関する映画の視聴を含む。
結果	逮捕された者の比率, 平均逮捕回数, 起訴された者の比率, 平均起訴回数, 財種別起訴回数, 犯罪の重さ, 初回逮捕までの期間の12か月間の追跡 態度 -警察に対する -学校に対する -犯罪に対する -刑務所に対する -構外作業場に対する Semantic Differential (意味微分)検査
注	100以上もの調整変数について分析が行われている。
割付の隠蔽	B(不明)
研究	Locke 1986
手法	無作為割付け
参加者	14歳から19歳のカンサス州の郡の53人の非行少年 白人65% 男子100%
介入	非対決的 教育的相互作用 少年を受刑者のマッチング
結果	自己申告犯罪及び少年裁判所・警察の公的犯罪の記録の最低6か月間の

	追跡
注	いずれの平均値についても標準偏差の報告なし 群の比率なし 著者ないし他の主要文献からこれらのデータは入手不能
割付の隠蔽	B(不明)
研究	Michigan D.O.C 1967
手法	乱数表を用いて割付 データ収集者は割付けに対して盲検化
参加者	ミシガン州のある郡の60人の非行少年
介入	ミシガン州の少年院を2回見学
結果	非行のための公的な送致ないし保護観察の違反の6か月間の追跡
注	介入の内容については、矯正局内部の短い報告には詳しく記載されていない
割付の隠蔽	A (適切)
研究	Orchowsky 1981
手法	無作為割付け
参加者	最低2回の犯罪歴がある非行少年80人 年齢13-20歳 男子100%
介入	対立的な受刑者の運営するプログラム 房への収容 看守によるオリエンテーション 受刑者との2時間のセッション
結果	裁判所での新たな係属, 平均新係属件数, 犯罪の重さなど, 公的な犯罪 尺度の, 6, 9, 12か月間の追跡
注	
割付の隠蔽	B(不明)
研究	Vreeland 1981
手法	4つの群に無作為割付け
参加者	ダラス郡裁判所で保護観察に付された160人の少年 男子100% 15-17歳40% 平均非行歴2-3回
介入	散髪, 肉体労働を含む, 13時間を要する一日がかりのオリエンテーション
結果	(裁判所記録を用いた) 公的及び自己申告による, 犯罪を行った者の比率 の6か月間の追跡 法に対する態度 友人の調査 抑止に関する調査

	自己イメージ ジェスネス・チェックリスト
注	本レビューにおける他の介入との一貫性を保つため、オリエンテーション群を処遇を受けていない群と比較した。しかしながら、オリエンテーションとカウンセリングを合わせて受けた群の結果は、オリエンテーションだけを受けた群とまったくといってよいほど変わらなかった。
割付の隠蔽	B(不明)
研究	Yarborough 1979
手法	乱数表に従い、研究者が無作為に参加者を割付けた
参加者	ミンガン州の4つの郡の裁判所の管轄地域の非行少年227人
介入	施設の見学, 分かれて受刑者と交流するために房に収容, 受刑者との対決的セッション, 一回の訪問は5時間
結果	その後の裁判所への送致, 新たな犯罪, 平均犯罪件数, 新たな犯罪を犯すまでの週数, 起訴された罪種, 平均勾留日数などによって測定される公的な少年非行の3及び6か月間の追跡
注	調整変数についての詳細な分析
割付の隠蔽	B(不明)

2. 除外された研究の特徴

研究	除外の理由
Aims Multimedia 1999	対照群がない, 事後測定デザイン
Ashcraft 1970	対照群がない, 事前-事後測定デザイン
Berry 1985	無作為化をせずに, マッチングによる対照群を使用
Brodsky 1970	対照群がない, 事前-事後測定デザイン
Buckner 1983a	無作為化をせずに, マッチングによる対照群を使用
Chesney-Lind 1981	無作為化をせずに, 不均等比較デザインを使用
Dean 1982	無作為化を使用した, 犯罪の尺度を持たない
Gilman 1977	対照群がなく, 事後測定のために3つの既成資料からデータを入手
Langer 1980	無作為化をせずに, マッチングによる対照群を使用
Lloyd 1995	イギリスにおける3日間の訪問プログラムのケース研究。対照群を欠く。
Mitchell 1986	対照群がない, 事前-事後測定デザイン
Nelson 1991	対照群がない, 事後測定デザイン
NSW BoS 1980	対照群がない, 事後測定デザイン
Nygard 1980	経過・実施に関するデータのみを報告。追跡あるいは対照群についての報告がない。

- O'Malley 1993 オーストラリアのビクトリア刑務所の経過・実施データ。対照群を欠く。
- Portnoy 1986 スケアード・ストレートについての映画,あるいは,より中立的な映画の視聴に,高校生を無作為に割付けた研究。実際のプログラムを含まない。犯罪に関する追跡データの報告なし。
- Rasmussen 1996 プログラムが郡の犯罪率に影響を与えた効果の大きさを推定した重回帰分析。対照群や無作為化は用いられていない。
- Shapiro 1978 対照群がない,事後測定デザイン
- Storvoll 1998 ノルウェイのスケアード・ストレートに関する経過・実施データ。追跡ないし対照群は用いられていない。
- Trotti 1980 対照群を欠き,参加者の反応だけを事後測定データとして利用。

3. オリジナルの研究で報告されたすべての犯罪アウトカムの一覧

研究	3か月後	6か月後	9か月後	12か月後	12か月後以降
ミシガン州矯正局 1967		新たな犯罪ないし 保護観察の条件 に対する新たな違 反を行った者の比 率			
GERP&DC 1979		その後警察と接触 した者の比率			
Yarborough 1979	新たな犯罪を行っ た者の比率 罪種 新たな通告を受け た者の比率 平均犯罪件数と標 準偏差 新たな犯罪までの 平均週数と標準偏 差 勾留日数とその標 準偏差	新たな犯罪を行っ た者の比率 罪種 新たな送致を受け た者の比率 平均犯罪件数と標 準偏差 新たな犯罪までの 平均週数と標準偏 差 勾留日数とその標 準偏差			
Taylor and Orchowsky 1981		裁判所に新たに継 続した者の比率 裁判所に新たに継 続した平均件数 (標準偏差はなく、	裁判所に新たに継 続した者の比率 裁判所に新たに継 続した平均件数 (標準偏差はなく、	裁判所に新たに継 続した者の比率 裁判所に新たに継 続した平均件数 (標準偏差はなく、	

	検定統計量のみ) 犯罪の重さの平均 (標準偏差はなく, 検定統計量のみ)	検定統計量のみ) 犯罪の重さの平均 (標準偏差はなく, 検定統計量のみ)	検定統計量のみ) 犯罪の重さの平均 (標準偏差はなく, 検定統計量のみ)
Vreeland 1981	新たな犯罪を犯したものの比率(公的尺度) 新たな犯罪を犯したものの比率(自己申告尺度)		
Finckenauer 1982	新たに通報を受けた, 警察との接触, 裁判所への出頭をした者の比率 犯罪の重さの平均スコア(標準偏差はなく, 検定統計量のみ)		
Lewis 1983			逮捕された者の比率, 起訴されたものの比率, 平均逮捕回数(標準偏差なし), 平均起訴回数(標準偏差なし), 初回逮捕までの平均期間(標準偏差なし)
Locke et al 1986	検定統計量のみ		

Cook and Spirrison 1992	平均犯罪回数(標準偏差なし), 犯罪の重さの平均(標準偏差なし) 平均犯罪回数(標準偏差なし), 犯罪の重さの平均(標準偏差なし)
----------------------------	--

4. 含まれた研究の手法的な適切さに関するまとめ

研究 (総数N)	無作為化	脱落	アウトカムの偏り	実施	手法についての総評
ミシガン州矯正局 1967 (60)	割付けに乱数表を使用 群の同等性に関する検定の報告なし	わずか2名の参加者のみ脱落	追跡のために少年施設の記録を利用 研究者は群の割付けから盲検化	問題の報告なし	合計60人しか割付けられていないことを考えると、同等性の検定を行っていないことは気になるが、それ以外に、観察された結果を疑う理由はない。
GEP & DC 1979 (161)	無作為割付けそれ以上の情報なし	報告なし	その後の警察の報告 問題の報告なし	問題の報告なし	報告中、結果を疑わせる記述なし
Yarborough (227)	研究チームが無作為割付けを担当 すぐれた手順書を利用 同等性の検定は満足できる結果	分析から省かれた不参加者多し	研究者は裁判所記録からデータを集めたが、割付け条件から盲検化されていたかどうかは不明 政府機関も、自らがやっているプログラムに関する否定的結果を報告	問題の報告なし	不参加者が存在し、これらが分析において関心を払われていないことが問題 これら以外には、報告書を見る限り、JOLTプログラムの効果が「ない」あるいは「わずかに有害」であることを疑わせるものは

					ない。
Orchowsky & Taylor 1981 (80)	無作為割付を使用, 同等性の検定は満足できる結果	9か月後に41%が脱落, 12か月後に55%が脱落 研究者は, 9か月後と12か月後について, 同等性の検定を行い, 満足できる結果を得ている	少年裁判所の新件受理のデータが主たるデータ源だが, そこからどのようにしてデータを収集したかの記述はない。	問題の報告なし	6か月後の時点の否定的な結果と逆に, 9か月後・12か月後の大規模な脱落は, 9か月後・12か月後の時点の肯定的な結果と対応している。 同等性の検定は, 両群が依然として比較可能であることを示しているように思われる。
Vreeland (79)	1981 無作為割付を使用, 同等性の検定は満足できる結果	(実験群4つのうち)2群については, 脱落は報告されていない。	裁判所データと自己申告データを利用。その他の情報なし	問題の報告なし	報告中, 結果を疑わせる記述なし
Finckenauer (81)	1982 無作為化から逸脱。11のうち6つの送致先決定機関において無作為化の手順に違反。 同等性の検定は, 実験群の59%に対し, 対照群は40%しか非行歴が	報告なし	研究者は, プログラムのスタッフではなく, 裁判所ファイルからデータ収集	問題の報告なし	無作為化からの逸脱が問題。研究者は, 無作為化の手順を守った送致先決定機関だけに限定した分析を行い, 実験群の31%, 対照群の17%が再犯してい

	ないことを示した。			問題の報告なし	ると報告
Lewis 1983(108)	同等性の検定は、満足できる結果だが、わずかに実験群のほうが優っているように思われる。	追跡期間中、参加者は一人しか失われなかった。	カリフォルニア州青少年局が自らプログラムを運営し研究を行いデータを収集しているが、プログラムについて否定的な結果を報告	問題の報告なし	研究報告には、観察された結果を疑わせる記述はない
Locke et al. 1986 (53)	無作為化を使用同等性の検定は満足できる結果(ただし、脱落后に行われたかどうか不明)	すでに小さな標本中、40%が追跡中に失われ、32人しか研究には残らなかった。	研究者は、裁判所データを収集	問題の報告なし	研究からは大幅な脱落があり、結果を疑わせる。研究者は処遇について効果がないと報告しているが、オッズ比や重み付け平均差を計算するために必要なデータを提供していない。

<p>Cook & Spirrison 1992 (176)</p>	<p>ケースファイル番号の奇数・偶数を用いた擬似無作為割付(もととなる番号は、連続に振られた、擬似ランダムな番号)。手続きからの若干の違反が認められたが、実際の比率は不明。省かれたケースがある。脱落の前後に、同等性の検定は行われていない。</p>	<p>追跡期間中に24%が失われた。群が依然同等であることを保証するための分析は行われていない。</p>	<p>裁判所からデータを入手。その他の情報なし。</p>	<p>問題の報告なし</p>	<p>同等性の検定が行われていないこともあり、脱落は、結果に疑問を抱かせる。しかし、もっと大きな問題は、メタ・アナリシスを行うのに必要な、標準偏差を報告していないことである。全てのデータは、プログラムが、犯罪尺度に対し、わずかに否定的な影響を与えていることを示しているように思われる。</p>
--	---	--	------------------------------	----------------	--

参考文献

本レビューに含まれた研究の出典

Cook DD. *Effects of a non-confrontational prisoner-run juvenile delinquency deterrence program*. Unpublished Masters thesis, Department of Psychology, Mississippi State University. 1990.

Cook DD, Spirrison CL. Effects of a prisoner-operated delinquency deterrence program: Mississippi's Project Aware. *Journal of Offender Rehabilitation* 1992;17:89-99.

Finckenauer JO. *Scared Straight and the Panacea Phenomenon*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1982.

Greater Egypt Regional Planning & Development Commission. *Menard Correctional Center: Juvenile tours impact study*. Carbondale, IL: Greater Egypt Regional Planning and Development Commission, 1979.

Lewis RV. Scared straight--California style: evaluation of the San Quentin SQUIRES program. *Criminal Justice & Behavior* 1983;10(2):209-226.

Locke TP. *An Analysis of the Kansas State Penitentiary Juvenile Education Program*. Unpublished Masters thesis, Department of Psychology, University of Kansas 1982.

Locke TP, Johnson GM, Kirigin-Ram K, Atwater JD, Gerrard M. An evaluation of a juvenile education program in a state penitentiary. *Evaluation Review* 1986;10:281-298.

Michigan Department of Corrections. *A six month follow-up of juvenile delinquents visiting the Ionia Reformatory*. Research Report No. 4. Lansing: Michigan Department of Corrections. 1967.

Orchowsky S, Taylor K. *The Insiders juvenile crime prevention program*. Richmond: Virginia Department of Corrections. 1981.

Vreeland AD. *Evaluation of Face-to-Face: A juvenile aversion*

program. Unpublished doctoral dissertation, University of Texas, Dallas. 1981.

Yarborough JC. *Evaluation of JOLT as a deterrence program*. Lansing, Michigan: Michigan Department of Corrections. 1979.

本レビューから除外された研究の出典

Aims Multimedia. *Scared Straight! 20 years later* [film]. Clatsworth, California, Author. 1999.

Ashcraft JL. *Closeout report on the Orleans Parish (LA) Juvenile Awareness Program*. New Orleans, LA: Mayor's Criminal Justice Coordinating Council. 1979.

Berry RL. *Shape up: the effects of a prison aversion program on recidivism and family dynamics*. PhD dissertation, Department of Psychology, University of Northern Colorado. 1985.

Brodsky SL. The prisoner as an agent of attitude change: a study of prison profiles' effects. *British Journal of Criminology* 1970;10:280-285.

Buckner JC, Chesney-Lind M. Dramatic cures for juvenile crime: An evaluation of a prisoner-run delinquency prevention program. *Criminal Justice & Behavior* 1983;10(2):227-247.

Chesney-Lind M. *'Ike Na Pa'ahao: the experience of the prisoners. A juvenile awareness program*. Report No. 258. Manoa, Hawaii: University of Hawaii at Manoa, Youth Development & Research Center. 1981.

Dean DG. The impact of a juvenile awareness program on select personality traits of male clients. *Journal of Offender Counseling, Services and Rehabilitation* 1982;6(3):73-85.

Gilman L, Milin RK. *An evaluation of the Lifers' Group Juvenile Awareness Program*. New Jersey State Prison, Rahway, New Jersey. Trenton, NJ: Department of Corrections. 1977.

Langer S. *Fear in the deterrence of delinquency: A critical analysis of the Rahway State Prison Lifer's Program*. Phd Dissertation, Criminal Justice, Rutgers University, Newark, New Jersey. 1980.

Lloyd C. To scare straight or educate? The British experience of day visits to prison for young people. *Home Office Research Study No. 149*. London, UK: Home Office. 1995.

Mitchell JJ, Williams SA. SOS: Reducing juvenile recidivism. *Corrections Today* 1986;48(3):70-71.

Nelson Z. *The Day in Prison Program. The First Twelve Months*. Victoria, Australia: Community based Corrections Division, Victoria Office of Corrections. 1991.

New South Wales Bureau of Crime Statistics and Research. *Day in Gaol Programme: Research Report No. 8*. Author. 1980.

Nygaard CH. *Synopsis of the findings, conclusions and recommendations from the evaluational study of the Department's Youth Assistance Programs*. New York State Department of Correctional Services, Division of Program Planning, Research and Evaluation. 1980.

O'Malley P, Coventry G, Walters R. Victoria's Day in Prison Program: An evaluation and critique. *Australian and New Zealand Journal of Criminology* 1993;26(2):171-183.

Portnoy RN. Ego defenses as a predictor of deterrence. Ph.D. dissertation, Department of Psychology, University of Nebraska. 1986.

Rasmussen DW, Yu Y. *An evaluation of juvenile justice innovations in Duval County, Florida*. Tallahassee, FL: Florida State University. 1996.

Shapiro A. *Scared Straight* [film]. Santa Monica, CA: Pyramid Films. 1978.

Storvall AE, Hovland A. The Ullersmo Project: Scared Straight in Norway 1992-1996 [Ullersmoprojektet: "Scared Straight" I Norge 1992-1996]. *Nodisk Trdskrift for Kriminalvidenskab*

1998;85(2):122-135.

Trotti TC. *Save the Children Program - An Analysis of Client Reaction*. Columbia, SC: South Carolina Department of Youth Services, Research and Evaluation Unit. 1980.

その他の文献

Blum J. and Y. Woodlee. 2001. Trying to give kids a good scare. *Washington Post* June 3:C01.

Finckenauer, James O. and Patricia W. Gavin. 1999. *Scared Straight: The Panacea Phenomenon Revisited*. Prospect Heights, Illinois: Waveland Press.

Franklin, Patricia. 2000. Read to succeed: An inmate to inmate literacy program in Washington State. *Journal of Correctional Education* 51 (3): 286-292.

Hall A. 1999. Jailhouse shock aims to scare youths straight. *The Scotsman* October 26:12.

Holley, Phillip D. and Dennis Brewster. 1996. A description of Speak Outs in Oklahoma Prisons. *Oklahoma Criminal Justice Research Consortium Journal* volume 3 (August).

Lipsey Mark W. 1992. Pages 83-127 in Thomas C. Cook, Harris Cooper, David S. Cordray, Heidi Hartmann, Larry V. Hedges, Richard L. Light, Thomas A. Louis, and Frederick M. Mosteller (eds). *Meta-Analysis for Explanation*. New York: Russell Sage.

Lipsey Mark W. and David B. Wilson. 1998. Pages 313 – 345 in: Rolf Loeber and David P. Farrington (eds.). *Serious and violent juvenile offenders: Risk factors and successful interventions*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Lipton Douglas, Robert Martinson, and Judith Wilks. 1975. *The Effectiveness of Correctional Treatment*. New York, NY: Praeger.

Locke Thomas P. 1984. *An Analysis of the Kansas State Penitentiary Juvenile Education Program* (unpublished Master's thesis). Department of Psychology, University of Kansas.

Lundman Richard J. 1993. *Prevention and Control of Juvenile Delinquency. 2nd Edition*. New York: Oxford University Press.

Middleton J., E. Reeves, R. Lilford, F. Howie, C. Hyde, D. Elbourne, A. Oakley, and D. Gough. 2001. Collaboration with the Campbell Collaboration. *British Medical Journal* 323:1252.

Muhammed L. 1999. Kids and crooks revisited: Some were 'Scared Straight!'. *USA Today*. (April 12): 4D.

O'Donnell, Robert and George P. White. 2001. Teaching realistic consequences to the most angry and aggressive students. *Middle School Journal* 32 (4): 40-45.

Petrosino, Anthony J. (2000). Answering the why question in evaluation: The causal-model approach. *Canadian Journal of Program Evaluation* 15 (1): 1-24.

Petrosino Anthony J. 1995. The hunt for experimental reports: Document search and efforts for a 'What works?' meta-analysis. *Journal of Crime and Justice* 18:63-80.

Petrosino Anthony. *'What Works?' Revisited Again: A Meta-Analysis of Randomized Experiments in Rehabilitation, Deterrence and Delinquency Prevention* [dissertation, Rutgers University]. Ann Arbor (MI): University Microfilms.

Petrosino Anthony, Robert F. Boruch, Cath Rounding, Steve McDonald, and Iain Chalmers. Assembling the Campbell Collaboration Social, Psychological, Educational and Criminological Trials Register (C2-SPECTR). *Evaluation Research in Education* 14(3 & 4): 206 - 219.

Petrosino Anthony, Carolyn Turpin-Petrosino, James O. Finckenauer. 2000. Well-meaning programs can have harmful effects!: Lessons from experiments in Scared Straight and other like programs. *Crime &*

Delinquency 46: 354 - 379.

Scripps J. 1999. Prison tour serves as a wake-up call. *The Forum* (Oct 27): 1.

Sherman Lawrence W., Denise Gottfredson, Doris Layton MacKenzie, John Eck, Peter Reuter, Shawn Bushway. 1997. *Preventing Crime: What Works, What Doesn't, What's Promising. A Report to the United States Congress*. College Park, MD: University of Maryland, Department of Criminology and Criminal Justice.

Trusty G. 1995. Sheriff's office, juvenile court resources used for restarts. *Louisiana Youth Care Magazine* 18(5): 3-5.

United Community Action Network. *Services: Wisetalk (Scared Straight)*. www.ucan.av.org/services.htm. (accessed 26 April 2001).

United Press International, August 21, 2003, p 1008233w3635.

UPN 1999. *Scared Straight! 20 Years Later*. Television programmed on US television: host Danny Glover (<http://www.contrib.andrew.cmu.edu/~aaron2/upn/upn-specials.html>). 8pm 15 April 1999.

U.S. Congress, House Committee on Education and Labor. 1979. *Oversight on Scared Straight*. Hearings before the House Subcommittee on Human Resources, 96th Congress, 1st Session, June 4th. General Printing Office: Washington, DC.

U.S. Department of Health and Human Services. 2001. *Youth Violence: A Report of the Surgeon General*. Rockville, MD: U.S. Department of Health and Human Services.

Weisburd David, Lawrence W. Sherman, and Anthony Petrosino. 1990. *Registry of Randomized Experiments in Criminal Sanctions, 1950-1983*. Los Altos, CA: Sociometrics Corporation, Data Holdings of the National Institute of Justice.